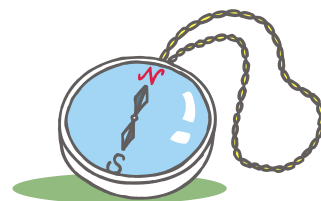


羅 針 盤

第 12 号

令和7年7月7日（月）



◆ 6月23日「沖縄全戦没者追悼式」より

沖縄戦から80年もの月日が経過し、最後の激戦地となった沖縄県糸満市にある摩文仁（まぶに）にある平和記念公園では、太平洋戦争末期の沖縄戦での犠牲者を悼（いた）む「慰霊の日」（6月23日）に「沖縄全戦没者追悼式」が営まれました。住民を巻き込んだ激しい地上戦の末、20万人以上もの人たちが亡くなり県民の4人に1人が命を落とした昭和20年の沖縄戦。沖縄県は、旧日本軍の組織的な戦闘が終わったとされている6月23日を「慰霊の日」と定めています。今年の追悼式の式典では、児童生徒を代表して、沖縄県豊見城（とみぐすく）市立伊良波（いらは）小学校6年生の城間一步輝（いぶき）君による平和の詩「おばあちゃんの歌」が朗読されました。（全文を掲載します。）一步輝君の祖母が毎年、「慰霊の日」に涙を流しながら「うんじゅんわんにん（あなたも私も）艦砲ぬくえーぬくさー（食い残し）」と歌う姿をつづった「おばあちゃんの歌」。



一步輝君は歌の意味を祖母に尋ね、艦砲射撃で負傷して生き残った人は「艦砲の食べ残し」と言われていたことを知りました。生き残った祖母は自責の念を抱え、脚の傷を隠しながら戦後を過ごされてきました。祖母の苦悩に触れ、こみ上げてきたのは感謝の気持ちでした。一步輝君は、沖縄戦を生き延びた祖母から聞いた体験に胸を痛め、平和のバトンを受け継いでいく決意を詩に込めました。平和のバトンを繋いでいく使命は、私たちにもあるのではないのでしょうか。（※写真は「平和の礎」です。）

「おばあちゃんの歌」

沖縄県豊見城市立小学校6年 城間 一步輝（しろま いぶき）

毎年、ぼくと弟は慰霊の日に
おばあちゃんの家に行って
仏壇に手を合わせウートーをする

一年に一度だけ
おばあちゃんが歌う
「空しゅう警報聞こえてきたら
今はぼくたち小さいから
大人の言うことよく聞いて
あわてないで さわがないで 落ち着いて
入って いましよう防空壕」
五歳の時に習ったのに
八十年後の今でも覚えている
笑顔で歌っているから
楽しい歌だと思っていた
ぼくは五歳の時に習った歌なんて覚えていない
ビデオの中のぼくはあんなに楽しそうに踊りながら歌っているのに

一年に一度だけ
おばあちゃんが歌う

「うんじゅん わんにん 艦砲ぬ くえーぬくさー」
泣きながら歌っているから悲しい歌だと分かっていた
歌った後に

「あの戦の時に死んでおけば良かった」
と言うからぼくも泣きなくなった
沖縄戦の激しい艦砲射撃でケガをして生き残った人のことを
「艦砲射撃の食べ残し」
と言うことを知って悲しくなった
おばあちゃんの家族は
戦争が終わっていることも知らず
防空壕に隠れていた
戦車に乗ったアメリカ兵に「デテコイ」と言われたが
戦車でひき殺されると思い出て行かなかった
手榴弾を壕の中に投げられ
おばあちゃんは左の太ももに大けがをした
うじがわいて何度も皮がはがれるから
アメリカ軍の病院で
けがをしていない右の太ももの皮をはいで
皮ふ移植をして何とか助かった
でも、大きな傷あとが残った
傷のことを誰にも言えず

先生に叱られても
傷が見える体育着に着替えることが出来ず
学生時代は苦しんでいた

五歳のおばあちゃんが防空壕での歌を歌い
「艦砲射撃の食べ残し」と言われても
生きてくれて本当に良かったと思った
おばあちゃんに
生きていてくれて本当にありがとうと伝えようと
両手でぼくのほっぺをさわって
「生き延びたくとう ぬちぬ ちるがたん」
生き延びたから 命がつながったんだね
とおばあちゃんが言った

八十年前の戦争で
おばあちゃんは心と体に大きな傷を負った
その傷は何十年経っても消えない
人の命を奪い苦しめる戦争を二度と起こさないように
おばあちゃんから聞いた戦争の話を伝え続けていく
おばあちゃんが繋いでくれた命を大切に
一生懸命に生きていく